パレット物語

シシウ生

其六

テー君は飽まで萬難に打ち勝つて、東都の畫壇に立つ決心であつた。然るにテー君の花々しい奮闘は遂に永續する事が出來なかッた。絶倫の勇者は暗涙を呑んで西に走るの止むなきに至つた、之れは實に同情に値する大悲劇であッた。テー君の技術が漸く進んで、サア之れから大に勇躍しやうと云ふ時。郷里の父君は明け暮れ、我愛兒の行末を懐ふの余り、遂に病の床に就いて、日夕テー君の名を連呼せられるやうになッた。そしてテー君に一日も早く歸省すべく望まれた。吁この消息を得たテー君の胸中はそも奈何であッたらう、之れでもテー君は泣きながらも歸らなかッた、其後郷里より歸省を促す手紙は度々テー君の手に披かれた、意志金鐵の如きテー君は尙頑として歸省しなかッた。この事を聞いた僕の主人はテー君に滿腔の同情を寄せた、そして且ッ說き且ッ慰めて歸省を勸告した。天地に一人しか無い父の愛に反いて迄も成効を急ぐのは可くない、如何に藝術が尊重すべき者だと云ッて、親を捨て、家を捨て、人倫を蹂躙して迄、事を成さんとするのは決して正當な事ではない、不德義だ、卑怯だ、そんなに個人主義を振り廻して得た名譽に幾何の價値がある、あらゆる事情と係累と闘ひつゝ得た成効こそ、眞に男子的成効では無いが、藝術家だッて人の子だ、して見れば人生と全く沒交涉だと濟して居る譯には行くまい、而かも君の前途は尙春秋に富んで居る、御父さんに安心させた上でゆッくり研究を進めれば可ひぢやないか、歸り給へ！一體御父さんをどうするんだ。と口を酸くして忠告したが、之れでもテー君は意志を飜さなかッた。神經質な主人は吾事のやうに心配して、どうしてもテー君を說服しやうと、遂に長文の手紙を書いて歸鄉を勸め、若し之れでも尙僕の忠告を容れなけりや絶交すると言ッて遣つた。早速返事が來た、鉛筆でパガキに書いてあつた、曰く『君が懇厚なる芳墨は此吾をして充分に泣かしめぬ泣かぬを意地とする此吾を限りなく泣かしめし君の書翰は、永久に吾が机裡に潜むなるべし、されどもされども、あゝされども吾！は遂に……返書を認むるを得ざるなり、瘦腕に滿身の力を罩め、天外を睨みつゝ碎けよと打ちたる胸の底より只一聲、死して後止まんのみ、あゝ、泣月生』とあッた、泣月生とはテー君の別名であッた。一度精力の絶倫に驚いた僕は、茲に至ッて更に頑固の絶倫に驚倒した、僕の主人も流石に斷念したと見え、之れぢや仕方がない、愈絶交するから一日ゆッくり會合して別れやうと云ッた遣つた、斯くてお互ひに忙しい日の午后を半日都合して、神田の寄席に仲よく遊び暮し、序手に最後の記念撮影も遣ッた後、九段坂下、俎橋の袂に、名殘の握手ヒシとばかり……永久の交りを絶ッた。頃は丁度明治四十年の秋の夕ぐれであッた。けれども元々主義の相違から起ッた絶交である、主人は其後間もなく、田舍教師になッて東京を去つたが、夫れでも心の中では始終テー君のことを思ッて居たらしい

處が翌年六月の末、突然**テー**君からが**ハガキ**が舞ひ込んださうだ、曰く『**シシウ**君、僕はもう駄目だ、なッては居にい、駄目だ〳〵、宛で御話しにならない、意志も主義もメチャ苦茶だ、之れと云ふのも斯ふだ、マア聞いて吳れ給へ、親父の病氣も既に一年半になるが未だ癒らない處が……（書くに忍びず中畧）嗚呼**シシウ**君、僕も矢張り人間であッた、此報に接する每に暗涙に咽ばざるを得ないのだ、僕は斷然意を決して歸鄕する事にした、白馬會も先週限り止した』（下畧）主人はこの葉書を手にした時、泣き乍ら喜んで早速慰問狀を出した樣であッた、そしてやッと之れで安心したと言ッて居た、讀者諸君、如何に悲痛な文字ではないか、一葉の**ハガキ**は能く人生の苦痛を語り盡して居るでは無いか。この消息があッて以來**テー**君と主人の交情は再び舊に復した、聞けば今**テー**君は鄕里にあッて、良く父君に仕へながら、一方硏究を怠らぬとの事である。ヤレ〳〵**テー**君の紹介が意外に長いものとなッて仕まッた。失敬〳〵。

其　七

テー君の奇蹟に就ては尙材料豐富だか、感心の中毒が起ッても御氣の毒だから、もう切り上げて置く。序手に今一人長い顏の人があッたことを話したが、今度は此長顏君の事をスッパ抜いて見やう、長顏君本名は**エチ**君と云ふ、之れが又仲々一癖ありげな御方であッた、どうせ一週一度の安息日を、薄暗い講習所で繪具をいぢくッて暮さうといふ連中だもの、毛色の變ッたのゝ多いのは當り前さ、この**エチ**君は繪よりかも尙一層俳句の方が好きで、其方面の造詣は頗る深かッたやうである、時とすると講習所の**ストーヴ**の傍て、半日位俳諧論を吹き通して仕まう事もあッた位だ、**エチ**君元來は東海道筋のさる町の吳服屋の若旦那である、普通で行けば意氣な前垂に堅氣な角帶ギュッとメめ、帳場格子の中の算盤持ッて、長松を指揮すべき身でありながら、持ッて生れた藝術家的性格は、兎角二一天作の五と相容れず、一ッ東京にでも飛び出して、本場の舞台に繪でも硏究して見たいと發心はしたが、扨て大切な△△屋の秘藏息子、賴んで見た處で、店代々の暖簾の外に、一歩も出さぬと叱られるは必定、ハテ何とか妙案もがなと、散々智慧の絞り染、或る夜私かに夜具の中より苦心慘憺、考へ拔いた計謀美事成立、翌日會心の笑を漏らしつゝ、ウマ〳〵と上京して、先づ水彩畫講習所の一生徒となり、後には太平洋畫會にも通ッて熱心に硏究をして居た。天下暫くは平穩無事にして、**エチ**君の胸中頗る得々たるものがあッたが、頃しも上野公園で例の東京博覽會が開かれる事になッた。その時**エチ**君の父君は、博覽會見物の爲め突然上京して君の宿を訪ふた、當時**エチ**君は上野櫻木町に下宿して居たが、不意に父君の訪問を受けた時の驚きは實に觀物であッたさうだ、驚いたのばエチ君ばかりぢや無い、父君の驚きは又格別であッたとの事。細長い四疊の室の壁には、怪物のやうな神像のデッサンがあちこちに張ッてある、額椽、畫板、**パレット**、**ブラッシュ**、そんなものが落花狼籍の態で室は足の踏み場もない、書棚にはヤレ審美學綱要だの、藝苑雜稿だの、今古各句集

だの、そんなもの斗りヅラリと並んで居る。この有様を見た父君の驚きは無理もない。實は**エチ**君、家を出る時、神妙らしく嚴父に向ツて、之れから新時代の店には、どうしても簿記學が必要だからと說き付け、簿記學校に行く樣な顏をして上京後玆に一年、首尾能く今日まで遣ッて來たが、天網踈にして漏さず遂に今日突然の臨撿に萬事休した譯である。室に在るものは繪の道具と俳句の書物ばかりで簿記棒一本もない、**エチ**君まさかそれは皆人の物ですとも云ひ兼ねて絕體絕命、一々白狀に及んで仕まッたと云ふ事である。それかあらぬか其後暫らくして、**エチ**君は鄉里に歸ツて仕まツたが、今は矢張り家業を逃れて某市に好きな文筆を振ツて居るさうである。男生徒の記述は先づ以上で盡きた。女生徒の方には別に取り立てゝ話す樣なのは無かッたが只一人、二十四五の不得要領な女が居た。何をしてる身分の人が、家が何處に在るのか分らない、皆の人々から常に不思議がられて居た、顏も日本人の樣では無かッた、何でも單身露西亞までも行ッた事があるさうで、日露戰爭が起ツた時、歸朝して敦賀に上陸したら、露國の軍事探偵と間違へられて困りましたなどと話した事があッた。この女はその內講習所に來なくなッたが、未だに疑問が解けないと主人は言ッて居る。其他には辯護士の令孃が一人、石版屋の娘さんが二人、それ丈であッた、その人々達も男生徒の樣に永續は仕なかッた。先づ以て三崎町時代に於ける原人種の話はれ之れ丈として筆を擱く。

（七月二日稿）

報　告

松本水彩畫會の趣意

〇本會は松本水彩畫會と稱す〇本會の趣旨を贊成する者は何人と雖も會員たる事を得〇本會の目的とする所は會員相互に水彩畫の硏究をなし高尙なる趣味を養はんとするにあり〇本會の目的を達んが爲めに每月一回集會を爲し寫生、作品の互評等をなす。〇適當なる時期を撰びて寫生旅行をなすとある可し〇斯道の大家を招聘し講習會を開く事ある可し〇春秋二回に展覽會を開き其作品を一般觀覽に供する事ある可し〇會費は當分要せず

事務所の所在を知らせ給へ（編者）

日本水彩畫會新會友

德島縣海部郡川東村大字大里村	武田國由
東京本鄉區東片町百三十四	小林高逸
兵庫縣多紀郡南河內村	森本宗吉
大阪郡東成郡中本村大字中通	高見駒治郎

■大三島宮浦警察分署へ『みづゑ』を送られたしとのハガキ來りしも差出人の性名なし（發送部）

■本號原色版『日ざかり』は、酷暑中の製版にかかり不結果に終りしと田中より申出あり、讀者諒焉。